扶桑

近代艶源者

二

へ13
3265
2

へ13
3265
2

近代艶語者

同孫

一 世捨賣乃棚　岩崎の丸市俵
　　志賀原の艶男

二 百日の滝糸語　五陳乃釜吹
　　清水のゑ食

三 俄百性の楽　笠井の三重切男
　　小石川の揚投賣

巻二

早稲田文庫

㊀ 洞乃花梅　汐汲婦人
人形おとこ

㊄ 美又美女　吹捨乃犬八
七弦琴浪人

㊀ 器源の市郎　赤蕾糸絶男

春は岩も今もとぐ〜迎山野はくさ〜きと見すぐし
かづく〜炬霞洞もつ〜こ岩斜は峰て窟亮ゆめ度ふ
衣桂　青ゆ中で京山のむ〜とわもへかさま色〜世の
中は事など打かこちて青れ面とんれだあやしみ
男枝は歩後進てまつと呼げなく菴中て入る多點して
産すみ衣掘づき裏列衣破きられど西伽羅の薫とだぐ
なくぬよそのさ海もいとけさかく石流苦月はと思いるく
ちまきだ河岡は信せ絶ちゃん いなな法業は君とたす〜
なまりと河ふ男在ゆ答ずて戌年ては色みてぞ
あき岩多は生種なりと云捨てまる〜點〜てあるばら

遊びにうきて昔は戦場ふるとかからずして、よろハ
ものよ酔ぶを、秋ハ月よりかすて世ようる業さへ、さ〜しば
業を〜人の傾婦乃ようぬまてにほゞされ、歌舞伎曲
まふりて、そのかを、ものとし〜今下枝の家職とは、ほく〜
はゞあ海へ〜妓女抱童と相もう事と悦う〜そ、かく
那〜う海異相の人となりつ世と縁らう〜く浪ゆて
あんとやさ〜くと表よ歩へてうるれ、みをよりの絶
あよ作ら〜男来て、情異人よりふまこと見ゆすき
ほ〜事なゞ〜もあんむ〜ハ足下れ風よ多ひ、藏の
摩みと恋、歪の何なすあとも見ゆ迄、みれ言葉ホ事
とと知て、人ふ〜も立ゆ、浪程よなるま〜ゞ今と弱ね

家業ハ捨す、自分〜て世ハ流きゞ亀情の里ゆたな
まあ乱ハあり、ながら中くにうとかし、分乃さ
ぎ代業〜む境ハ二人ふり、ふ迄ゞ亀成ゆ
有れ何と離る〜ゆあ〜ず、潜よ人の紹ゆと長下にハ
ちやけ境異と絵ゆて、常に自蒲と褥と〜煙男を
自述て錦情とな〜樹間の風今と事れ、ふ〜屋と
歓〜て、〜歓〜事ゆ〜、〜ゆ云ふ亀通乃学、要
もその元をふて、一度浦れ富ゆて、長久乃乃を形ふ
同〜く八男れ拙情よきんふに、異人長て亀なき
人よけ通をかふ浦と、むつ〜、ふか〜長下にハちゞめより
相別〜情もあきゞ、あ〜ふ〜ふ〜浦ん今人異の男

うつる春色をまつぬいはそのまゝ折いやしくかゝるまゝにて世に行甲斐なし　えより悪道に入こそ殊の道なるきゝ乃のいろ〳〵いろ〳〵色にぬぎ捨よりき極をこそ成ハあゝ次第入てハ人れうろ乃色を知世ハまゝなぬ常をさて是ハ数〳〵かまゝとの春なる事を思よハけちゝめゝこと初春ハ明る色園よ曉乃清やを春こ宿れ軒端よ霞をん清とおもゝ〳〵秋の初ハ仏前ハ魂まつる業ハ捨すゝきをれみゝと月を見ぬこゝろとなりて世を思ひ仮きぬ事と還てたゝもゝむい悪乃よ入の門より形ハ外ハかゝず義人乃色をすきぬを懐て静に自黙して言をやむるハ心をゆるかせん為ゆゝなれ悪ゆゝ動ず心〳〵

れ形を労せず形をきハ仮ゝ乃時ハ常に多ゝて楽ハ苦といまゝ逆乃ゝ多あず心慌よいまゝ形ハ常ハ常ハ者ゝ乃ゝ者ゝ遠ゝ乃ゝ者ゝ遠ゝ乃ゝ者ゝ遠

二　五陳の笠吹、清水の乞食

姉しき成し事を哭メ一人ぞ成る法男に、あるクメ
草葉に流涙をうちはらひ、笠をあやなく脱ぎて、
岩下に座をなして吹やまず、謡の音声に感じ
ぬ。うらいしく愛ありて、遠の嵐にたづけく
ぬ。あやに奇怪なり。時うつるいまに妙なる
竜宮ぶき、もんとをとどまりすると、ちよ、所愛怜なる
ぬ。曲をきくに、法師よりあつまりなるず、法男も
あやしく思ひながら、もの歌の嬉しきにめで、謡をなす
事一更よ他なし。ちぢくあつて同まず、ふく法よ
何国へ行し見へざりけきバ男悲法師してよりて和

と伝ふ。水もまたども、法師事なく、夫よりうまうひ歌
つまて、慈善暮れ、月を過貝成童ぬて法れバあるに
とあるまず、補佛乃力を彼で二ひ法師よ達もやせん
なと、ほく信を打こうして、絡湯法師るに百日を待て
乃法よ、霊山も通法乃れよりまを人の非人あるて毎
日廉を作りて高ひ、ひ、ぶ友乃乞食まて拘へども
養へず、と自れ糧を求ひきだ、あるうれ器よ考かく
あて眠ぶごく破産してあるいと不思義なる者と
ふを付て見へしに、中ほくなぬ相あるけきバかの
人の側近くあるうあ、いう成れるこにまゝ法せでかく
世をとゝとゝ家よ隠きぬとあるいさず、光を包てや

ほーまたの家と同じよ。此人笑ひて何をのたまふや
らん。兵衛貧苦して麦らまーボ人を家者をとたのり
を後ハ何乃言葉をなかるー。是よりしてハ糸借
すゆ如ゆ。此人よ猶りて帰るに時ーして菓蒲なと
送まゞ借。和に茶餞の数ハ少けず。そや百日ゆ歩と
けて。家人とかーボ人と拍て。おゆやかる借るに此人
我ゆ同ハ見下ゆ有様をたまふすにいくゆ為みとんま
おゆする事ありてかくゆ佛縁にと此づき給ふなるん
とゆふ。はーめよりゆあまーボ法を。ボ人へ入ゆそ
こそ見下ゆ吟せなまゆ。笑ゆ感声激て志ぐーく彩を

なすゆとの也。此家を見に来ーて。笑をゆあ彩ゆに
ゆくそ。後ゆ人天五福の如るゆ。ぐーー。吹ゆ生ーゞ
則消。変化なゆとかなーまん。家ゆ女ゆとりえ臣。
変じて生ーゞ変じて消。えまーゞ笑ゆ和ゆとなくゆ
笑ゆの中ゆもなー。兵衛を乗ーて市ゆ愛心を求ゆ
を変ーゆ家ゆとの也。を商ゆ変又事ゆ。愛と皆私の愛ん
ゆて。あゆーん元和ゆあ。家と思ひて思ゆ去給へと言に
殊成かゆと行て。それより観音の法ゆ行て。法師と成事に
愛せーゆ笑ゆを抱て。何国ゆ
双紙絵なゆと負て市中売廻ーゞかりと売べきゆ事を
いまず。糧乃絶ゆとハ売事ゆとなく笑ーゆるゆ也

㊂ 岩中は三重切男 小石川の揚枝賣

微雨斜に晴て月さゆかるゝ秋寒蛩あはれを催し
あらぬきなくを枯り寺に生死二門乃觀をわゝ嗟

岩下に居を占めて有り深林の岩中は寺異の
世間人まゝて岩はれよりは祇打掛てあり〳〵ゝ稍して
秋より三重切乃作る和歌〳〵ゝ春の金は花菊を織るる
自然の却すべ解て片腸になるを〳〵ゝ樹蘭の薫を吹や
なを深よ通〳〵ぬいこめ半呂は嵐よ閑つゆすさまよ
千年傳統として已めるすべ〳〵ゝ我そなへむ
らいていまなくやんと信るに寺異の男養て紙ハ
色より少は當て書れ四の生るゝ我一生はあるさ

はと語らんずにたゝぬ春秋を越〳〵ゝ淫ハ父母の懷よそ
育せまして寒偏は振を去るゝ千年乃あ所はよと
我家の武を稱ゝ詩を寺は大概を学び藝にあそんて
却のれをするゝ御十五をるてくとかゝるにるゝが
ひ多の文結よ始けるゝ父れ家を去て都ようかゝ江戸
ゝ云て名乃便を使よ殘を求むきて枝奥み費〳〵一日
とゝくゝる事なゝ然つれ〳〵枝とゝめ殘ゝ事はゝ
かくれでゝ人間の一生ハ現よりゝと化成事を思推
しゝめ一時れゝ〳〵に速ひの服をさゝ後ゝあゝへあれ
を駕に乗てくれれ却むくにまるゝ也あゝへ絶きやむかく
すゝ事三十余年和歌よ奥〳〵糸作に極〳〵哀に内

にもりてハ南西王めたのしことにたゝず。常にけ
竹よ極異をかゞへて。憂を遠る迚今負やめてたの
まぬと。徳し。竹よ住徳と云まんと云て。ゆゝ綱よを
て吟すきむよ。鹿鹿し。猿猴と家に歸るぬ
かくす家初より。竹物に又粉乃異人きたり。けあ
もよの長家がよ辞。家えよるず。淡よあると家
竹吟人よ向ていたい。呂下に境異きくに。家たのこと
となすれるよあゝず。我一生に天命ハ呂下に仰うり。未
和と異ありを遠をいらぐ。既よ生ゝて。系。進迚碧
年ぬく。ゑ時ハ士官と成。従僕をゝぐさへある時ハ軍徒
に草枕す。飢て糧なく寒て服なす。徳きゝる境異よ

分をもすゝ家きハ。残をゝ吟ゝとなく貪ゝけきゝも
うきへず。富てと憍らゞ。暴境貪富ともに如をと観ず
きゝ。今楊枝をけづる。蔵つて。世をりて家呂下今然のまゝと嘆ひて。楽を
棚にのて。世をりて家呂下今然のまゝと嘆ひて。楽を
竹ハ下哉と笑ひて。三重切男間と流ゝ。異人とゝと
なゝて。ゆりゝゝが。ゆに蓄西よりゝ室に入て。ニ人ゝもにけ
和ゝて。自辨ゝて。安ハ三重切ふきて。屋と。雲雨ごと
に楽ゝ。ゝて。笑せゝ

廿 汐汲婦人 人形男

かゝらずも屋の草菴にありて月を畫讃す或日行脚の語りしハ何れむかし玄圃の事の侍りてよひし室にきたりし其の辺の賑ひ人となりやかに不知の風景といへるきよく左右脇ハ海邊の香ふりて磯限に僅なる大山あり仰ぎて之を見れバ寂寞たる樹間に龍神の社遠て火へなど迎ひよく隠しそれよりたのかられ濱よふハ賤家の奴婢汐焼汐畑に衣裳を秋けに袖を肩を傍にあちこちまんれ手を嘆めてさうと愁へ浦をなく立ならぶを負の事よとゝをとめ郷に小積笠にてらひ稍休みまでむかふより何かぬ世の色の衣稲まろく抛

打ちひげゐ涙がちいさき花を摘み水に流して来るを
婦人方と見れば、さてとなつかしい感人やうんと思ひ
やるまで歌きて、ほうなどこうき新人見涼さへいとなつ
かしう、色より浦よりはたらとう涼星に行くとの色幼なあて
世よおろれまぐ十にうぬ間ふ父い名を埋む事を悔て
武蔵より行きが便うへかまて疎い乳母れいやーけなる
に育せるき年月さるるにおもいずとひ七とも斗先
よ不通れ人と縁をむすび、うてび弱くーと嫁ーく
思ひーに男いうなる故にひ和と言て何回ーなく
ゐう涼時書おきーー孫乃化言を見れた芝よりし
てい書ようゐ物とりーじ、それまて拒こなすなよ

なと議ぜーー筆れかうこうとるとかなーや女男之二重
国に行ぜん事を絶ーーよとおもへた素れ拒とて何
行ひなく越男と貴かるーと袖に深海とおりまゐ
て夫乃うまへとヨそれんあとーと拒いこハー
く行ふ通こて記ーり拒果涼ーーせあて故人いな
涼婦ととむかへこの数まかーと人波汐ふ山神の
場離をきーめて形奉ると結涼ふ賢女のうろこー
と感じて義をとうぶめりて。ある山涼よ水流まていさ
ぎうげなる通ひ乃草菴あるーー。こよりて
入れたちいさき指人形なーべてこ脇よ五六寸る
男れ何くなく拒びたまてあり。こよい逢ふ女張

あらゝ人よたゞらずいとゞ高なれば婦人のみ悪と強る
いと男第つて人間世上のあり様皆かくぬべきゝ・やむき
だやむと悔こ迫けい迫くと墓ふやなざれば嘆ると・進ば
誣法・そ孫者・弟にいあり・ふたに・ものこ男に向今を
く迫き多と楽むい人にちこやまんと思ふ・男なと笑
けて・無ずなゝ・ほさるい地のそても何少ちこつまんの
と思うん・物と・ゆゝらず・物あるい浦の・色・和と・求むるい
和よあ・ば・水れ・ふたて・命と・ゆゝ・孫ば・濁ちく・浦た・則を
部や・部なれば・変ぜず・変ぜざれだ・ぜ・為も・こ面い・ぜ・為
る・物んぞ・姫と・助ん・ば・地も・人乃・為よ・やむ・ま・あ・ば・と云
しと・語るそこそ・都ゆ・山乃・源・ぜな・島ゝ

五　吹捨乃天八　七陸奥宰人

ある時人の語りけるは、奥の国勢多の郡へ行きてあり
て、天八乃伝と聞くに、見なれぬ面白く思ひて、脇に
ゐる風ふきかぶりて、さすひあるときにそなへめ相
馬の一時一百と離まんまんかるもの書ものすち
墓をなれば夫より下化粧通し一筆づつ連ひに
元せとうとうまま　懶婦乃掛　わ遠中に絶みかること
更に初ひ等事となく家々の軒下に一曲をうた
べめ　絶拍と待ず乃掛みて通る　その楽こんこんぬ
そら笑ひしてもりに吹流川すぐ〳〵き水をたづねて
男女鞠ひに婿と嬢〳〵　三番　袖ちげく〳〵ゆべとちふ

なれば流れに寄せて思ひ乃多をあるとき
分奥家掛被て知らぬ客殿を
さしめて立やすひ騒人藪を立て様よ眠ぬ
蛍に詩子をつけらる　行平中にさらと長き髪
乃天さへ黄昏時須臾なれば　ある山間乃里に
入て一男を求まぬ　ぬ有もがるとあなることする
ぬ屬の薪むし　家ある　薪に陽炎ぬ
　　流堀をうる家あり　さらのぎきて見ぬ銀のうす
すけ　屏風中に紙絵乃雲布半掛て奥より鳴
竜の遠ふなどとあるに怪異張り張の中より
なぬ沼ありて葉や雲浮ぬくへと言とかなるげよ

婦ぶるもの〻三人男とともにと思へど清れ世にあれば
ばかりかぬ命もなぐ〻ぬきもの世を恋て先立さ
らん跡よ嘆いていろめんと歎きづむ抜と気〻物
い思ひ病人の所よと聞あるに又外ろうへ孫婦ふ世所
三三人まて備給なと打て泣んとするに抜れ振乃申
より年は程三十ばかりの女のうつくしげなる月花
打ふ事れ紅涙〻に打ふ涙あて無言にて
〻づき物〻抜伝をすとめて無もてあげず外ちづて
あ見〻ぶ涙〻てかのふ世よふ振者〻なるに奥よりも
小袖よ琴添て抜おけまバ抜世を琴を弾ふして
なと抜にてもげも無なり〻ぶ見てそ見ひ乃見〻

姫ふ常に弄びて志〻べつる程に美てれ形見と留志
かぐ〻乃所をなる我面影のうてかなる〻きて蓋抜乃姫と
もなりてたべと伝ふあ〻その奥に入ぬ抜人乃
袖もひ加へてかくなげきの中にもなれど今宵ハ一
夜ばかりすぐきかこと〻なく物ふれば明ふれあ所ど
に抜ふるなれど言に出てつげなる所ふもなくとう
乃西東ハあざやなるなて内ふ紛入〻美〻ふて抜女童
に帰食やすかよ御ふて抜せ姫ふ見ぬ〻ふすもの
今宵ハ宮のよこそとゆるけく寝むすぶに夢中にふる比
奥ふ育りて水よ菜すとぞ〻む中にんな色息と絶しと
汁ふ後ハ抜の書も絶て時〻ハいろ世ん物ふれよと

寺の僧なり。幾ハクほの月〜なるに人の死よこそ。孫王一
郎と聞〜為て化度寺とせしといとはるかるしに。潮
夜と明きびなき人ハ。常野の送る板題無けなげきに歎
とかきて。氣とたぶひぬるに。自鈴のとよみて死ける。
アるとため〜なく。新と筆も絶斗なり。かゝる時〜
も。琴の面表に。恒こうる。奥に七弦乃筆に。感音を激
音〜けるひ。然〜年にいる。幾年にかと。求めるれば。
ひ〜ふに。生死事大の顔掛て。栄斗れ男樣ふに。かゝるとて。起
ぶ中有〜いと。異なる人のかゝると思ひてから。哀傷の中ら。
いう。成人なれば。筆〜げと。言に。我弾ど。ますに。何ら
〜ふ。坤打破せん時。何まの。死よ。ひ琴琴せん。答て

打破せん時。爾にいう。昂尽打破すいうん。筆。何答ず
ゆて。異人筆。とう。恒て。されば。とよ。死。唐者ハ。書
異人として。生死となげうぬ。なけ。強て。悔ハ。愚成。
既に。変じて。生。変じて。死ハ。変。何。とゆ。
どうん。頃ハ。ク人ハ。ふ。ふつ。変。たり。永。永。恒ハ。生
死の変。たり。変て。嫁。変。唐。事。と。ふん。強。ば。変。る。人
に。ひて。我。何。と。歎。かん。と。云。に。ば。生。と。ハ。化。生。と。彼。ら。ぬ
事。と。言て。ゆ〜。ひ。男。て。そ。ハ。琴。ハ。ん。ん。七。弦。の。音。ら。る。べ
〜。絃〜。人ハ。武。義。て。達。人。縁。の。ハ。流。系。乃。福。異。に。何。
ぶ。常。に。馬。と。ぬ。ん。で。愛。し。〜。物。ハ。金。れ。沸。ふ。た。の。〜。ん。ど。
禅。単。ニ。人。と。激。〜。世。を。送。〜。異。人。も。